

皇居周辺地区における景観構造の変遷に関する研究

正会員 埼玉大学 窪田 陽一
学生員 埼玉大学大学院 小谷 俊哉

A Study on the Transitions of Landscape Structure
around the Imperial Palace

by

Yoichi Kubota, Dr.Eng. & Toshiya Kotani

概要

本研究は東京都千代田区内を対象地域として、江戸期から今日までに実施された都市計画的事業によって、皇居周辺地区における景観構造がどのような過程を経て変遷し、各時代毎にどのような景観の特徴を有していたかを考察すると共に、現在見られる景観がいつの時代に形成されたものであるかを明らかにすることを試みたものである。

(キーワード：皇居周辺、景観構造、都市計画)

1. はじめに

都市の景観は時代と共に変遷して行くが、その要因としては都市計画的な事業が挙げられる。丘陵・河川等の原地形の人為的改変や、その上に建設される建築・橋梁・道路や土地利用の変化は都市計画的思想に根ざしているものと考えられる。

本研究は、皇居を中心とした千代田区の景観が、各時代においてどのような都市計画的事業によって変遷してきたかについて時代毎にその特徴を把握し、考察することを試みたものである。そのために千代田区に関する文献調査、故地図・錦絵・写真の収集、現地調査などの方法で研究を進めた。

皇居周辺地区においては16世紀末に徳川家康がここを居城とし、城下町を構築するために都市計画事業を行ったのを初めとして、文明開化期、市区改正期、震災復興期、戦災復興期、高度経済成長期などの転換期にわが国を代表する様々な都市計画的事業が行われてきた。

2. 皇居周辺の地形的特徴(図1)

景観について考察する前に千代田区の地形がどのような特徴を有しているかを把握する必要がある。千代田区の地勢は大別して麴町・番町のある起伏の激しい山の手台地部(標高20-30m)及び駿河台の

台地(標高20m程度)などの西側及び北側の高台部分と、神田や丸の内のある東側低地部分に分かれる。区内を流れる河川は、北部を西から東に流れる神田川、そして北部中央辺りから南下しながら東方に流れる日本橋川がある。他の水辺としては旧江戸城の外濠及び内濠がある。江戸時代初期に原地形の埋め立てや掘削が行われてから後は、濠の埋め立てなどの変化はあるものの、現在に至るまで標高的に大きな変化はない。

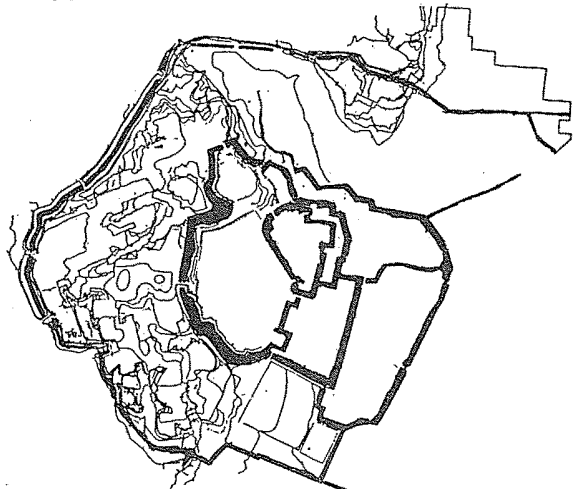


図1：皇居周辺の地形
(1883(明治16)年頃、等高線は2m間隔)

3. 景観構造の時代的变化

景観構造を大きく変化させることになった都市計画的事業により以下のように時代が分けられる。

- (1) 江戸時代初期の城下町形成期
(1590(天正18)年～1657(明暦3)年)
- (2) 明暦の大火後
(1657(明暦3)年～1867(慶応3)年)
- (3) 明治文明開化期
(1868(明治元)年～1889(明治22)年)
- (4) 市区改正期
(1889(明治22)年～1923(大正12)年)
- (5) 震災復興期
(1923(大正12)年～1945(昭和20)年)
- (6) 戦災復興復興期
(1946(昭和20)年～1955(昭和30)年)
- (7) 高度経済成長期
(1955(昭和30)年～1973(昭和48)年)
- (8) 現在(1973(昭和48)年～)

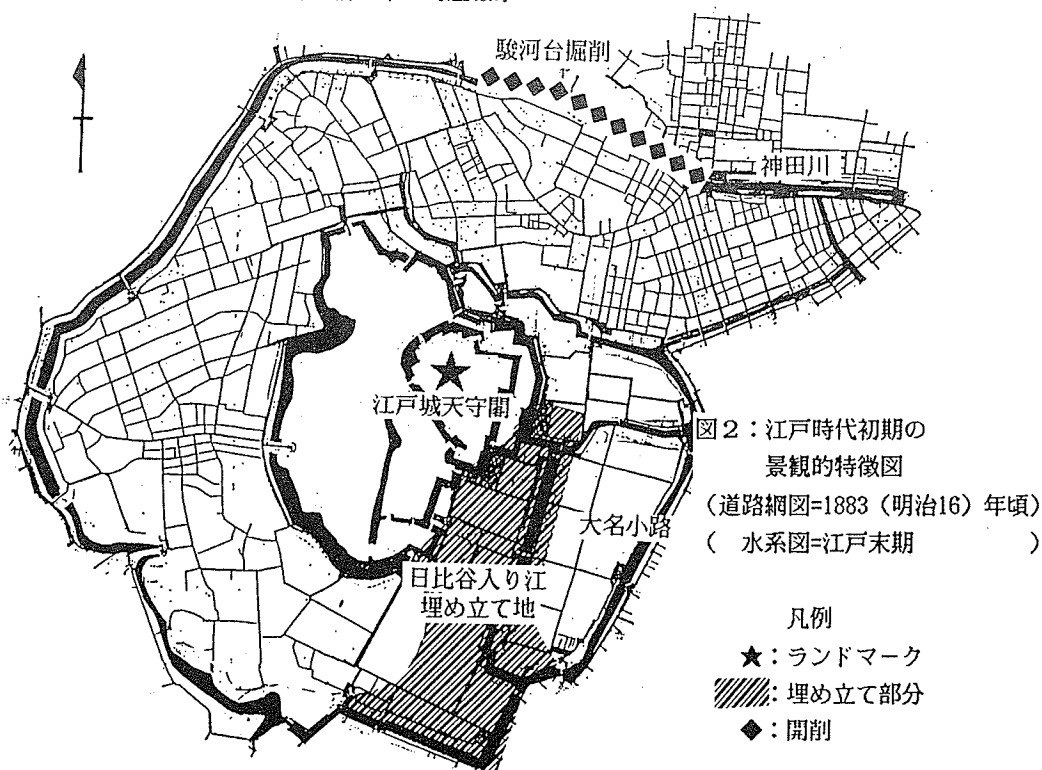
以下、各時代における主要な景観構造変化について述べていく。

- (1) 江戸時代初期の城下町形成期 (1590(天正18)年～1657(明暦3)年) (図2)

1590(天正18)年8月1日、徳川家康が江戸に入国した当初は、現在の大手町・神田橋一带に町屋は茅

葺で百軒程度しかなく、城郭は貧弱であった。城下東方の低地は大部分遠浅の入江または海辺の葦が茂った湿地帯(日比谷入り江)で、城下にまで差し迫りここかしこに汐入りの茅原があり、町屋・侍屋敷と呼べるようなものはなかった。城下の西南部においては藁原が広がりをを見せていた。

家康はここを居として城下町を構築するに当たりまず1592(天正20)年に江戸城西丸築城工事を行い堀の揚土で日比谷入り江を埋め立てた。1601(慶長11)年には大名が屋敷を構え始め、大手門外の現在の丸の内周辺には大名屋敷が建ち並び「大名小路」と称されるようになった。そして江戸城防御の為に外濠を造る目的で一大事業である神田山の切り崩し工事が1603(慶長8)年から始められた。これは人為的に原地形を改変させるだけにとどまらず、のちの名所絵にも描かれたような溪谷と富士山を展望できる空間を生み出したと言える(図3)。この時期に形成された町割は現在でもその多くがそのままの区画で現在にまで残り、景観を構成する骨格要素として重要な役割を果たしていると言えよう。また江戸城の五重の天守閣(標高約80m)の威容は、武家社会の象徴として当時江戸中から見ることできたランドマークであった。



(2) 明暦の大火後(1657(明暦3)年~1867(慶応3)年)(図5)

1657(明暦3)年1月の「振袖火事」と俗に呼ばれる大火によって江戸中が罹災して江戸城も西丸を残して焼失し、天守閣は以後再建されなくなった。この結果求心性の高いランドマークが失われた。この大火を期に「江戸の華」であった火災に対する対策として御三家の城外移転、社寺地の郭外転出、火除地の新設(城北部及び北西部中心)や建築物の不燃化を意図した建築規制が行われた。耐火建築の政策は以後も行われ、徳川吉宗の時代の1716(享保元)年から始まった享保の改革では葦葺・茅葺・こけら

葺に土を塗った「土蔵」が奨励され、1720(享保5)年には瓦葺の指示が出された。これに伴って景観の構成要素である建築物外観の様相も変化していった。

景観的に特徴があり名所と呼ばれた場所を、「江戸名所図会」や北斎・広重らが描いたものから探すと、自然景観のみを対象としたものは少ないが溜池・九段坂(図4)・霞が関・お茶の水(図3)などといった起伏がある場所、遠景が望める場所が多いことがわかる。霞が関は坂の上から坂下方面を見ると遠景として東京湾が望める視点であった。お茶の水も富士山がよく見える視点場であった。

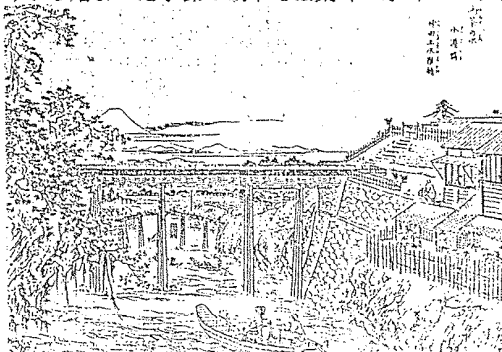


図3：お茶の水(江戸名所図会) [参考文献・105]

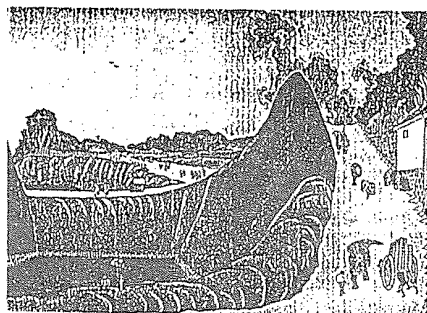


図4：くだんうしがふち(北斎) [参考文献・65]

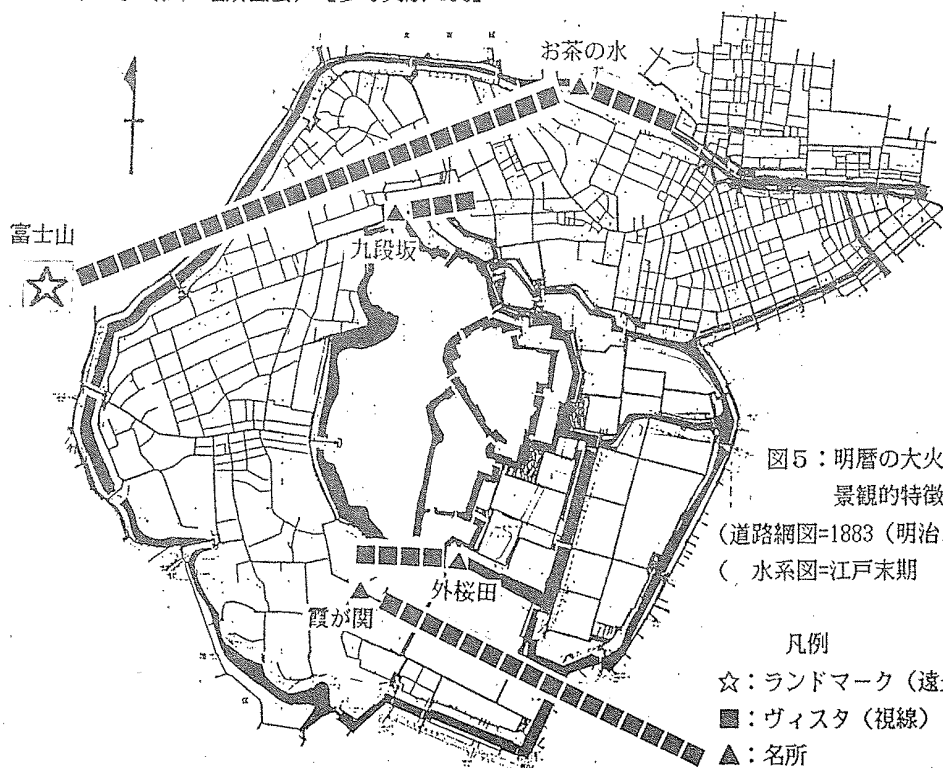


図5：明暦の大火後の
景観的特徴図
(道路網図=1883(明治16)年頃)
(水系図=江戸末期)

凡例
☆：ランドマーク(遠景)
■：ヴィスタ(視線)
▲：名所

(3) 明治文明開化期 (1868 (明治元) 年～1889 (明治22) 年) (図8)

1867 (慶応3) 年の大政奉還によって武家社会が崩壊し武家屋敷は荒廃、江戸城を防備していた外郭21門は1873 (明治6) 年に撤去された。代わって屋敷跡には省庁及び官僚の邸宅や軍事関連の施設ができ、また欧風思想の導入による洋風建築の建設によって景観は大きく変化することになった。かつて「大名小路」と呼ばれた丸の内周辺には軍事関連の施設や内務省・司法省・警視庁・裁判所などの官庁施設が建ち並び、こうした土地利用の変化によって景観が大きく変わった。日比谷には広大な陸軍練兵場が造られ、霞が関周辺では外務省・陸軍省や兵営ができた。練兵場は北の丸や三崎町にも造られ、軍事的要素の強い景観が皇居周辺に展開されたと言える。洋風建築の代表的なものとしては1881 (明治14) 年に起工した鹿鳴館 (図6) があり、西欧に劣らない社交場を設けようとしたことに文明開化期の欧風化思想の一端が表されている。また、かつて大名・旗本屋敷のあった麹町・番町・永田町付近には官僚等の邸宅が並び、この地域の高級住宅街としての性格は

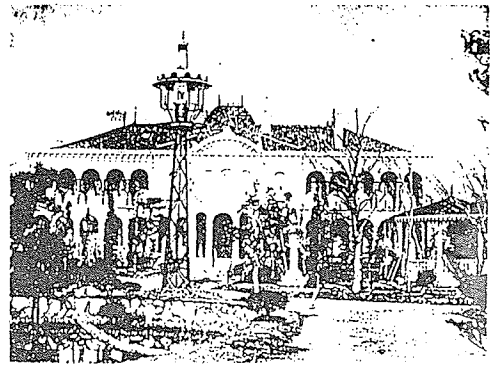


図6：鹿鳴館 [参考文献・1]



図7：九段坂 [参考文献・34-45]



図8：明治文明開化期の景観的特徴図

凡例

- ★：ランドマーク
- ☆：ランドマーク (遠景)
- ：ヴィスタ (視線)
- ▲：名所
- ▨：特徴的地域

(道路網図=1883 (明治16) 年頃)
(水系図=1883 (明治16) 年頃)

江戸時代から引き続き継承されている。一方、田安門外の九段坂上には1869（明治2）年に招魂社（現靖国神社）が建てられ、この付近に門前町の景観が生まれた。九段坂の景観は、江戸時代に引き続いて名所絵に頻繁に描かれる対象となった所であり、遠景のランドマークに富士山が見える坂上からのヴィスタが特徴的である（図7）。

（4）市区改正期（1889（明治22）年～1923（大正12）年）（図10）

1884（明治17）年頃から「市区改正計画」についての論議が活発化し、紆余曲折を経て用途地域制（日比谷・霞が関の官庁街、日比谷公園の造成等）、公園、市場（神田青物市場）、鉄道・道路の整備・建設等を主眼とする計画が決議され、市区改正事業として1910（明治42）年までの間に、財政難のために計画削減を余儀なくされながらもほぼ完了した。これによって丸の内地区を初めとする道路整備や日比谷公園の開園（1903（明治36）年7月）が実現した。日比谷公園は日本で初めての西洋風公園として造られ、皇居周辺地区で初めて皇居の外に広大な公共オープンスペースが生まれたことを意味する。丸の内

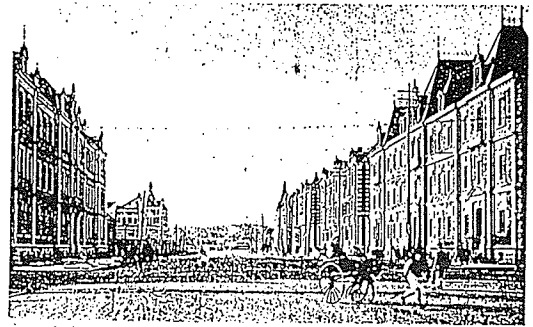


図9：一丁ロンドン [参考文献・77]

地区の道路整備と併せて1890（明治23）年丸の内・三崎町の陸軍用地が三菱に払い下げられ、丸の内地区は民間活力によってオフィスビル街が形成されることになった。1894（明治27）年に竣工した三菱1号館は本邦初のオフィスビルであり、1909（明治44）年までに13棟の赤煉瓦・石のビルが誕生しそれまでのビジネス街であった中央区兜町にとって替わった。「一丁ロンドン」（図9）に代表されるようにここに建設された数多くのオフィスビルがランドマークとなってこの時代の代表的な新しい景観の名所となった。これは、江戸時代の前期に求心的なランドマークとしてそびえていた江戸城天守閣に対して、初

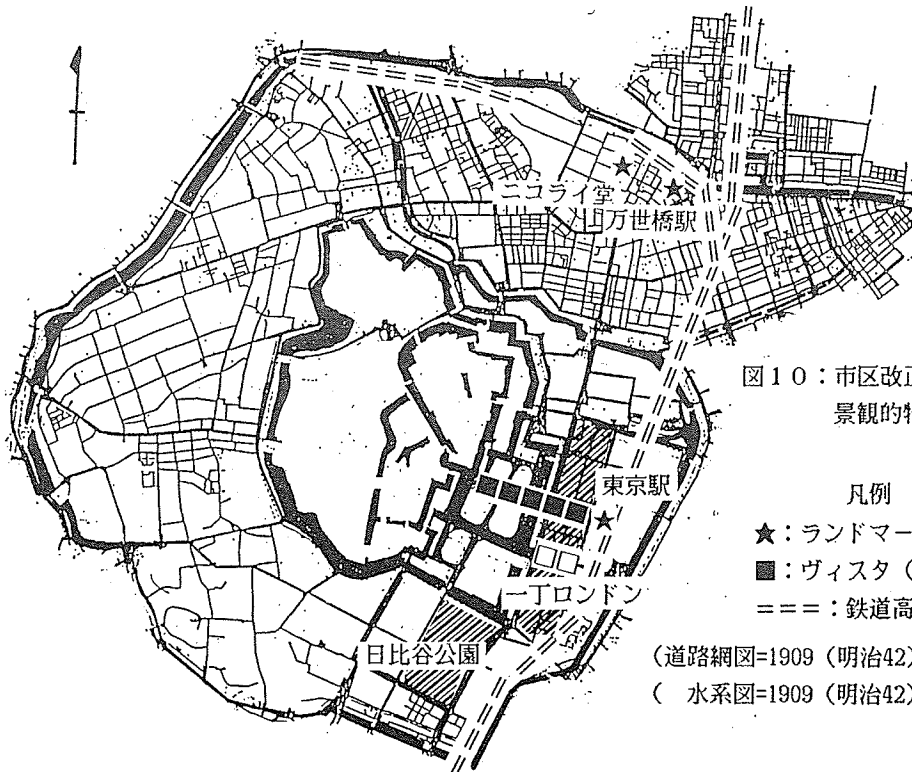


図10：市区改正期の景観的特徴図

凡例

★：ランドマーク

■：ヴィスタ（視線）

===：鉄道高架部分

（道路網図=1909（明治42）年頃）

（水系図=1909（明治42）年頃）

めて皇居の外にランドマークが群れとして出現したことを意味する。

また明治初期からコンドル、エンデ、バックマン、ホーブレヒト等を招いての様々な官庁集中計画が考案された。これは封建都市であった江戸から開かれた都市のイメージを目指した壮麗なバロック的都市計画案であったが、結局実現したのは司法省（1895（明治28）年竣工）や裁判所（1896（明治29）年竣工）といった僅かなものに留まったため、景観構造を根本的に改変させるまでには至らなかった。

この時期に鉄道網が発達し、人々の集中する空間ができると共に新しくランドマークとして駅舎が加わった。1912（大正元）年万世橋駅は初めての駅前広場空間を有する駅として誕生し（図11）、続いて1915（大正4）年には東京駅（図12）が開業して省線電車の始発駅が万世橋駅から東京駅に移った。特に東京駅は皇居と対峙する関係にあってお互いを結ぶヴィスタが開けており、強いアイ・ストップとなっている。

（5）震災復興期（1923（大正12）年～1945（昭和20）年）（図15）

1923（大正12）年の関東大震災によって千代田区はその大半が被害を被った。そこで後藤新平を初めとする震災復興院の震災復興計画によって立ち直りを見せることになった。復興事業においては特に道路網の整備に重点が置かれ、道路の新設・拡幅がなされた。特に千代田区東部に大正通り（靖国通り）と昭和通りが新設・延長され神田の商業地区を突き抜ける大幅員の道路が建設された。大正通りの新設・延長の際、万世橋駅前の須田町交差点が移動したことと東京駅に客足を奪われたことによって万世橋駅の名所としての存在感が薄れ、のちに廃駅となったため、この地区のランドマーク的建築が失われた。

また市区改正期から徐々に建ち並びつつあった霞が関の官庁街が充実して多くのランドマーク的建築を出現させている。その代表的なものとして1936（昭和11）年高台の上に建設された国会議事堂（図13・14）は、外校田門からのヴィスタの中で桜田濠を隔てて強いアイ・ストップとなる関係に置かれ、国家的モニュメントとしての景観を出現させた。

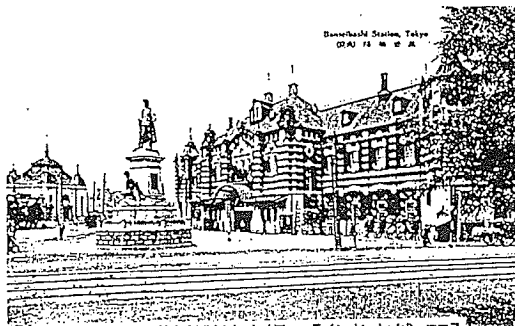


図11：万世橋駅前広場 [参考文献・77]

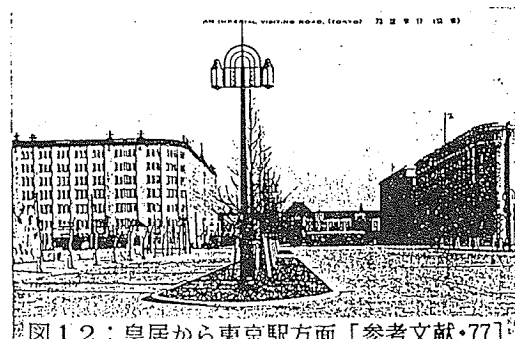


図12：皇居から東京駅方面 [参考文献・77]

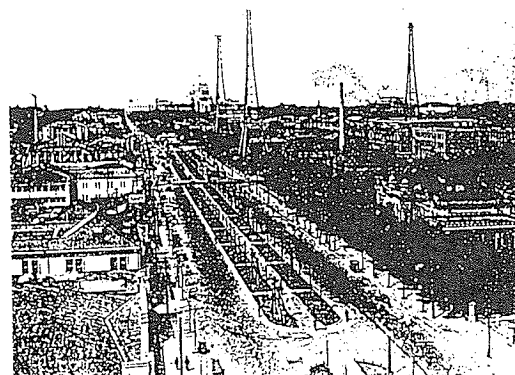
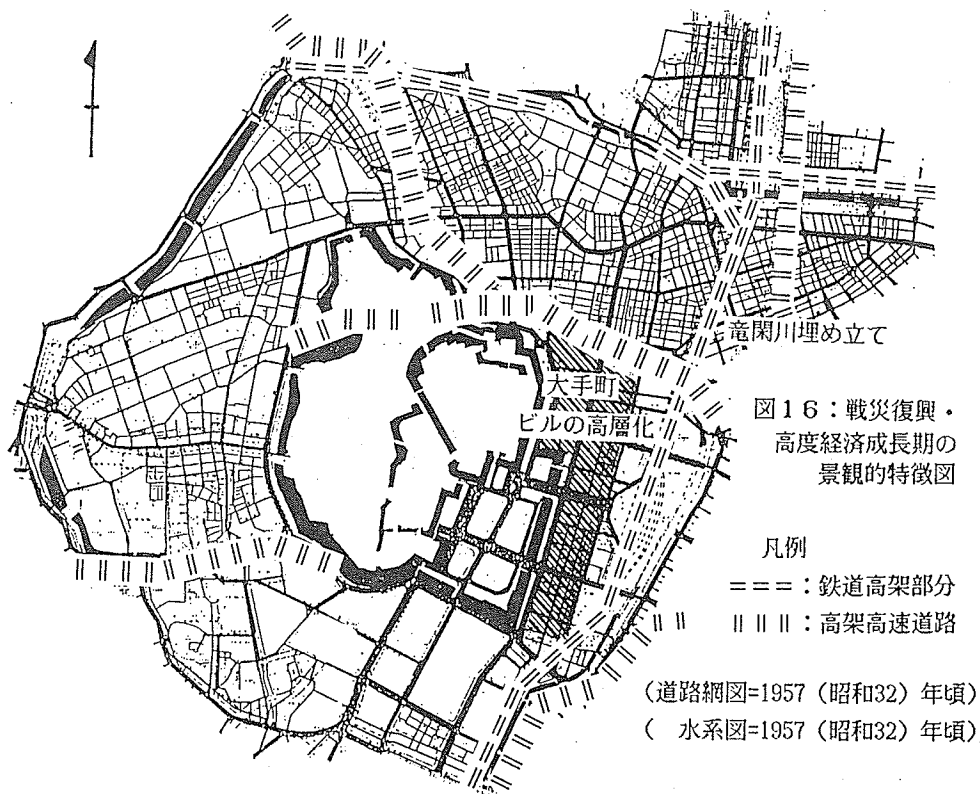


図13：内幸町から国会議事堂方面 [参考文献・64]



図14：明治10年代の外校田から現国会方面
（右奥建物：陸軍参謀本部） [参考文献・77]



(6) 戦災復興復興期(1946(昭和20)年~1955(昭和30)年)(図16)

戦災で千代田区の多くが被災し、瓦れきは処理のために堀に捨てられ、1950(昭和25)年には竜閑川も埋め立てられた。このため、地区を景観的に区分する境界としての水面が一気に減少し、これらの地区における景観の領域性が曖昧になったと考えられる。1950、51(昭和25、26)年頃から丸の内地区においてビル建設ラッシュが始まり、制限高度ぎりぎりの31mまで建てられて「第二の地平線」と呼ばれ美観地区ともなった。

(7) 高度経済成長期(1955(昭和30)年~1973(昭和48)年)(図16)

1964(昭和39)年の東京オリンピックを目指して完成が急がれていた首都高速道路は、時間・用地の問題から日本橋川や濠の上を高架で建設された。このことは水辺の上空を奪っただけにとどまらず、川に架かる橋や橋詰め広場の景観を損なうものとして、極度に地域を分断する景観的な力の作用が働いている。神田橋では橋詰め広場が首都高のランプに利用される状態となった。また、丸の内に新しくビル建

設を行うために赤煉瓦ビル群がこの時期に壊された結果、明治半ばの市区改正期に「一丁ロンドン」を構成した特徴的なランドマーク群が消滅した。そして大手町地区でのビルの高層化が始まった。

特に戦前に建てられGHQにも使われた第一生命ビル等を含む、皇居内濠に面した丸の内の美観地区内ではビルの高さが不均一になってきて、東京海上火災保険会社が超高層ビルを建設しようとした際には皇居を見下ろすような関係となるために、これを期に「皇居前美観論争」となったことは良く知られている。結果的にこの建物の高さは当初案より低く押さえられたが、スカイラインの不統一化は以後進行することとなった。

(8) 現在(1973(昭和48)年~)(図17)

当地区内及び地区外における建築物の高層化によって、かつてランドマークとして見ることの出来たものが見えなくなったり、陰に隠れて可視領域が減少しているものがある。明治に建てられたニコライ堂は聖橋と一直線上にあってそのヴィスタ的關係が特徴的であったのが、お茶の水駅周辺での高層ビルの建設によってその景観構造が損なわれた。また他

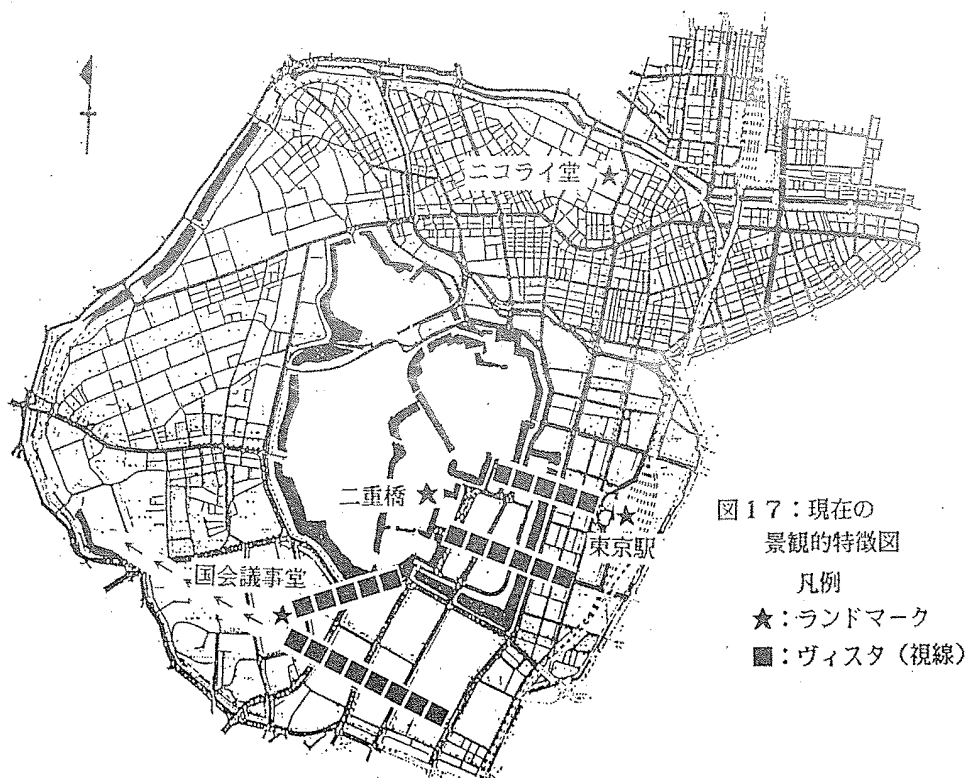


図17：現在の
景観的特徴図
凡例
★：ランドマーク
■：ヴィスタ(視線)

の三方向もビルに囲まれてしまい、かつて駿河台の高台にあることで丸の内や九段などかなり広範囲から見る事が出来たとは想像し得ないものとなっている。国会議事堂は外桜田門外からのヴィスタは今も変わらないが(写真1)、内幸町交差点からは背後にそびえる超高層ホテルと重なって見え、議事堂の輪郭線が消されている(写真2)。このように現存する歴史的建築物でも景観的なシンボル性が減少していく状況にあると言える。また江戸時代に駿河台のお茶の水付近や九段坂から望めた富士山も、現在では望めない。

4. 名所の分布

各時代の名所がどのように分布していたかを、図18に集成した。これを見ると、江戸期には自然地形や堀端などに分布しているのに対し、明らかに近代以降は建築物や都市計画街路等による新しい景観に興味が集中していることがわかる。その空間的分布パターンは、江戸初期に形成された都市の基本的骨格に対して付加された部分をよく示している。

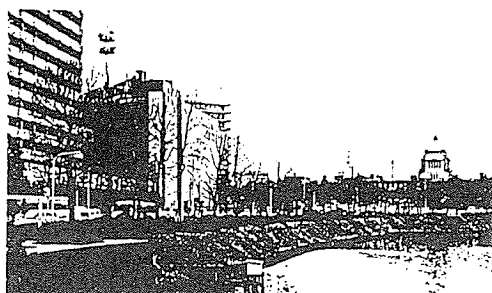


写真1：外桜田門から国会議事堂方面
(撮影：小谷 1991.02)

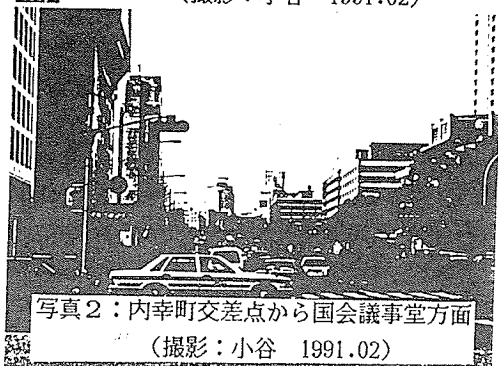


写真2：内幸町交差点から国会議事堂方面
(撮影：小谷 1991.02)



表：各時代の名所リスト

表1：江戸時代前期（～1657）

NO.	年代	名称
1		「江戸城天守・本丸」（江戸図屏風）

表2：江戸時代後期（1657～1867）

NO.	年代	名称
1	1834-36	「八見橋」（日本橋川、一石橋）
2	1834-36	「今川橋」（旧菟園川）
3	1834-36	「下駄新町」（神田駿台町の西裏通）
4	1834-36	「鎌倉町」
5	1834-36	「護持院原」（神田橋・一ツ橋間の漆の外の芝生）
6	1834-36	「飯田町 中坂 九段坂」
7	1834-36	「御茶水水道橋 神田上水懸樋」
8	1834-36	「三崎稲荷社」
9	1834-36	「筋違 ハツ小路」（筋違橋・昌平橋）
10	1834-36	「於玉ヶ池の古事」（神田松枝町）
11	1834-36	「弁慶橋」（於玉ヶ池東方和泉橋の通り、藍染川）
12	1834-36	「柳原堤」（神田佐久間町）
13	1834-36	「日吉山王神社」
14	1834-36	「平川天満宮」
15	1834-36	「柳の井」
16	1834-36	「桜が井」
17	1834-36	「霞が関」
18	1834-36	「霞が関古園」
19	1834-36	「瀛池白山祠」
20	1834-36	「瀛池」
21	1834-36	「神田明神社」
22	1834-36	「神田明神祭壇」
23	1834-36	「藍染川」（神田駿台町通り過ぎて東方に流れる溝）
24	1834-36	「主水井」（位置不明の為、図上にフットせず）
25	1800-06	「くだんうしがふち」（北斎）
26	1823-30	「東都融合台」富田三十六景（北斎）
27	1843-44	「かすみがせき」江都名所（広重）
28	1843-44	「御茶の水 水道橋」江都名所（広重）
29	1856-58	「外桜田弁慶堤町」名所江都百景（広重）
30	1856-58	「神田猫屋町」名所江都百景（広重）
31	(1814-61)	「かすみが関」東都名所（国芳）
32	19 C	「駿河台水道之景」（北斎）

（1-24は「江戸名所図会」から）

表4：市区改正期（1889～1923）

NO.	年代	名称
1	1896-1909	「三番町より不二を望む」（九段坂上）
2	1896-1909	「弁慶橋」
3	1896-1909	「比枝神社拝殿」
4	1896-1909	「神田神社男坂を望む」
5	1896-1909	「神田神社」
6	1896-1909	「神田小川町通り」
7	1896-1909	「宣誠御通門」（乾門）
8	1896-1909	「半蔵門より驛端を望む」
9	1896-1909	「九段坂」
10	1896-1909	「靖国神社庭園」
11	1896-1909	「飯田町停車場」
12	1896-1909	「お茶の水・駿河台」（聖堂よりお茶の水方面）
13	1896-1909	「神田市場」（神田多町二丁目、神田駅西）
14	1896-1909	「神田岩木町古町市場」
15	1896-1909	「神田柳原河岸通り」（柳森神社）
16	1896-1909	「駿河台岩崎家庭園より眺望」
17	大正中期	神田神保町通り
18	大正中期	九段坂と神田方面遠望
19	大正中期	行幸道路
20	明治後期	桜田門外
21	震災前	万世橋駅
22	震災前	万世橋駅
23	震災前	万世橋駅
24	震災前	九段坂下
25	震災前	飯田橋
26	震災前	遊就館
A		丸の内オフィス街（丸の内・日比谷・内幸町）
B		東京駅
C		馬場先門・通り
D		霞が関官庁街

1-16は参考文献85『明治東京名所図会』（講談社）から
7-26およびA-Dは参考文献77『絵はがきにみる日本近代都市の歩み』（都市研究会）から

表3：文明開化期（1868～1889） 表5：震災復興期（1923～1945）

NO.	年代	名称
1	1879-89	「二重橋」
2	1879-89	「御成二重橋ノ景」
3	1879-89	「本丸三重橋」
4	1879-89	「吹上釣橋」
5	1879-89	「外桜田遠景」
6	1879-89	「桜田参院本部」
7	1879-89	「虎ノ門工部大学校」
8	1879-89	「日枝神社」
9	1879-89	「九段坂」
10	1879-89	「靖国神社」
11	1879-89	「竹橋内」
12	1879-89	「萬代橋雨ノ景」
13	1879-89	「筋違通夜景」
14	1879-89	「神田明神」
15	1879-89	「紙幣局」
16	1879-89	「明治橋遠景」
17	1879-89	「鹿鳴館」
18	1879-89	「水道橋」
19	1879-89	「御茶ノ水」
20	1879-89	「神田川駿河台」
21	1876-81	「二重橋前乗馬兵」
22	1876-81	「御茶の水雪」
23	1876-81	「神田川夕景」
24	1876-81	「九段夜景」
25	1876-81	「萬代橋朝日出」
26	1876-81	「御茶の水雪」

（1-20は参考文献84『明治東京名所図会 井上安治画』（角川書店）から21-26は参考文献66『小林清親 東京名所図』（学習研究社）から）

NO.	名称
1	神田小川町より駿河台ニコライ堂の遠望
2	靖国神社の風景（橋上より）
3	東京通信病院
4	遊就館
5	聖人会館
A	丸の内オフィス街
B	東京駅
C	霞が関官庁街

（参考文献77『絵はがきにみる日本近代都市の歩み』から）

表6：現在

・千代田区観光協会「千代田区観光ガイドマップ」
・JTB（日本交通公社）編『東京みどころガイド』（1989）
上記二点を参考にして名所を抽出した

NO.	名称
1	皇居外苑（皇居前広場）
2	皇居東御苑
3	二重橋
4	北の丸公園
5	日本武道館
6	科学技術館
7	国立近代美術館
8	千鳥が淵
9	靖国神社
10	外桜田門

11	国立劇場
12	国会議事堂
13	山王日枝神社
14	日比谷公園
15	神田明神
16	ニコライ堂
17	弁慶橋
18	印刷・出版社街
19	学生街
20	秋葉原電気街
21	洋服・生地問屋街
22	薬品問屋街
23	金物問屋街
24	戦没者墓苑
25	水上公園
26	清水公園
27	東郷公園
28	平将門首塚
29	霞が関ビル
30	帝国劇場
31	通信総合博物館
32	交通博物館
33	神田書店街
A	丸の内オフィス街
B	東京駅
C	霞が関官庁街
D	皇居

5. 結語

これまでに述べたことから景観構造の変遷過程を要約的にまとめると以下になる。

(1) 軸空間の偏在：外桜田や九段坂、お茶の水、東京駅前等に見られるヴィスタのような軸線的に特徴のある空間が、系統性を持たずに偏在している。

(2) 求心的構造から遠心的構造へ：江戸時代には城内にあった天守閣による求心的ランドマークの構造が、明治以降皇居周辺に建設された洋風建築群等の出現で外向的なランドマーク構造に変わった。

(3) オープンスペースの分散化：江戸初期には城内のみであった大規模緑地が、明暦の大火後の火除地の制度、市区改正期の大規模公共オープンスペース等の出現で分散化した。

(4) 面的界限性の特質の継承：江戸時代に大名・旗本屋敷だった番町・麹町周辺は現在高級住宅街に、神田の商業地区は現在もそのまま継承されている。

(5) 地区外景観要素の影響の増大：現在、外周地区における建築物の高層化によって皇居周辺のランドマーク的建築物の輪郭線が消されてしまう問題が発生している。

本研究は、景観構造のマクロ的変遷を概括的に把握するに留まっている。今後、よりミクロな変化に関する調査を行い、体系的な整理を行なう必要があると考えている。尚、本研究は「千代田区都市景観研究会」における討議を参考に調査を進めたものであり、同研究会のメンバー並びに事務局である千代田区都市整備部普及調査課関係者各位、(株)ランドブレイン各位には資料提供等に関して大変お世話になった。記して謝意を表する次第である。

参考文献

- 1-3 小本新造・芳賀徹・前田愛 『東京空間(1)～(3) 1968-1930』筑摩書房 1986.09
- 4 東京都建設局 『東京の橋と景観』東京都 1987.12
- 5 東日本旅客鉄道株式会社 『東京駅と煉瓦』東日本旅客鉄道株式会社 1988.10
- 6 相賀 徹夫 『百年前の日本 モノクロ写真集』小学館 1983.11
- 7 森田 峰子 『写真記録 関東大震災』国書刊行会 1980.08
- 8 西ヶ谷 恭弘 『日本城郭写真集』小学館 1983.12
- 9 建築学会 『東京・横浜 復興建築図案』丸善 1931.02
- 10 村松 貞次郎 『東京のまちづくり』三省堂 1979.06
- 11-20 『日本の建築(1)～(10)』三省堂
- 21-33 野間 省一 『日本の博物館(1)～(13)』講談社
- 34-45 小西 四郎 『錦絵 幕末明治の歴史(1)～(12)』講談社 1977
- 46 千代田区教育委員会 『千代田区の文化財』千代田区 1982.03
- 47 東京都都市計画局 『東京の計画百年』東京都 1989.03
- 48 『東京みどころガイド』J.T.B(日本交通公社) 1989
- 49 地域交流センター 『東京の川』地域交流出版 1986.08
- 50 大河原 希雄 『建築法規の変遷とその背景』鹿島出版会 1982.06
- 52 陣内 秀信・東京のまち研究会 『江戸東京のみかた隅べかた』鹿島出版会 1989.02
- 53 岡崎 清紀 『今昔 東京の坂』交通公社出版事業局 1981.09
- 54 鈴木 理生 『千代田区の歴史』名著出版 1978.03
- 55 東京都建設局道路課編 『東京都道路概要』東京都 1946
- 56 小松 和博 『江戸城ーその歴史と構造ー』名著出版 1985.12
- 57 下中 邦彦 『アトラス東京ー地図で読む江戸ー東京ー』1986.10
- 58 『全集 浮世絵版画 6 富嶽三十六景(北斎)』集英社 1971.10
- 59 『全集 浮世絵版画別巻Ⅱ 広重』集英社 1973.01
- 60 諏訪 春雄・内藤 昌 『江戸図屏風』毎日新聞社 1972.12
- 61-63 『江戸時代図誌 5～7 江戸(一)～(三)』筑摩書房 1975.12
- 64 仲摩 照久 『日本地理風俗大系 2』新光社 1931.10
- 65 山本 三生 『日本地理大系 第三巻 大東京篇』改造社 1930.04
- 66 『小林清親 東京名所図』学習研究社 1975.11
- 67 『江戸名所絵巻』学習研究社
- 68 千代田区観光協会 『千代田区観光ガイドマップ』千代田区
- 69 陣内 秀信 『水辺都市』朝日選書 1989.11
- 70 『東京名所図会 麹町区之部』監書房 1969.01
- 71 『 』 神田区之部 〃 1968.11
- 72 『日本地誌 7』筑摩書房
- 73 諏訪 春雄・内藤 昌 『江戸図屏風』毎日新聞社 1972.12
- 74 原田 達夫 『道路交通史年表(紀元前から1981年まで)』警察時報社 1982.07
- 75 東京都生活文化局コッポラ 『新東京百景』東京都 1988.03
- 76 佐々木 宏 『建築昭和史』新建築社 1977.03
- 77 尾形光彦 『街・明治・大正・昭和 絵巻物にみる日本近代都市の歩み 1902-41』都市研究会 1980.11
- 78 陣内 秀信 『東京の空間人類学』筑摩書房 1985.04
- 79 藤森 照信 『明治の東京計画』岩波書店 1982.11
- 80 鈴木 理生 『江戸の川・東京の川』放送出版協会 1978.03
- 81-83 千代田区 『千代田区史(上)～(下)』千代田区 1960
- 84 『色刷 明治東京名所絵 井上 安治画』(角川書店)
- 85 『明治東京名所図会』講談社
- 86 鈴木 理生 『江戸の都市計画』三省堂 1988.10
- 87 天野 光三 『都市交通のはなし 1』技報堂出版 1985.08
- 88 内藤 昌 『江戸と江戸城』鹿島出版会 1966.01
- 89 三菱地所株式会社 『総別 丸の内今と昔』1952.11
- 90 『BRIDGES AND TUNNELS JR東日本の歴史的構造物』J.R東日本
- 91 藤森 照信・荒俣 宏 『東京路上博物館』鹿島出版会 1987.07
- 92 桐敷真次郎 『江戸東京の都市史および都市計画的研究(一)』(東京都立大学都市研究組織委員会) 1-9-A-J 1971.08
- 93 『明治・大正・昭和 東京 1 万分 1 地形図集成』柏書房 1983.11
- 94 『明治 大正 日本都市地図集成』柏書房 1986.10
- 95 『昭和前期 日本都市地図集成』柏書房 1987.03
- 96 『戦災復興期 東京 1 万分 1 地形図集成』柏書房 1988.04
- 97 樋口 忠彦 『景観の構造』技報堂出版 1975.10
- 98 野野上 慶一 『文明開化風俗づくしー横浜絵と開化絵ー』岩崎美術社 1978.05
- 99 下中(弓園) 三郎 『世界文化地理体系 3 日本Ⅱ 関東』平凡社 1957.07
- 100 野田 甲一 『概説 日本美術史』吉川弘文館 1965.04
- 101 山根 有三 『日本美術史』朝美美術出版社 1977.03
- 102 本内 信蔵 『日本の文化地理 6 東京』講談社 1968.08
- 103 小林新造・陣内秀信・竹内誠・芳賀徹・前田愛・宮田登・古原健一郎 『江戸東京学辞典』三省堂 1987.12
- 104 リンチ著、丹下・高田訳 『都市のイメージ』岩波書店 1968.09
- 105-107 下中 彌三郎 『新版 江戸名所図会 上～下』角川書店 1975.01